

2001年に『情事の終わり』をヴィーナスから発表して大きな評判を呼んだワン・フォー・オールの新作が届けられた。すでに輸入盤では何枚か紹介されていたこのグループの本邦初登場盤が『情事の終わり』で、それに続く今回の『危険な関係のブルース』が日本で発売される2作目だ。

ワン・フォー・オールはメンバーをご覧になればお判りの方も多いと思うが、ニューヨークを活動の拠点にしている6人の精鋭ミュージシャンによって構成されている。簡単に言うなら、ピアニストのデヴィッド・ヘイズeltaイン・トリオをコアにして、そこに3人のホーン奏者を加えたユニットがワン・フォー・オールだ。

しかしこれだけのメンバーが顔を揃えているのだから、もちろんトリオ+3ホーンというイージーな内容には終わっていない。6人のミュージシャンが織り成すさまざまなインタープレイやグループとしてのサウンドが、このユニットの聴きどころだ。そのことは、グループ名からも推測できる。

ワン・フォー・オールが最初のアルバム『TOO SOON TO TELL』(Sharp Nine)を録音したのは1997年2月25日のことだ。このアルバムには、“ワン・フォー・オール・フィーチャリング・エリック・アレキサンダー”とクレジットされていた。グループの目玉がアレキサンダーであることは言うまでもない。そこで、このような表記がなされたのだろう。ただし2作目からそれが消えているのは、ワン・フォー・オールがユニットとして、より対等な形で全員の関わりを重視するようになったからだ。

オリジナル・メンバーは、テナー奏者であるアレキサンダーを筆頭に、トランペットのジム・ロトンディ、トロンボーンのスティーヴ・デイヴィス、ピアノのデヴィッド・ヘイズeltaイン、ベースのレイ・ドラモンド、そしてドラムスのジョー・ファンズワースだ。レコーディングによってはベース奏者がピーター・ワシントンに交代することもあるが、本作はオリジナル・メンバーの6人によってレコーディングが行われている。

先に紹介したデビュー作も含めて、これまでに彼らが残してきた作品を列挙しておこう。

|                                    |       |
|------------------------------------|-------|
| 『TOO SOON TO TELL』(Sharp Nine)     | 1997年 |
| 『UPWARD & ONWARD』(Criss Cross)     | 1999年 |
| 『THE LONG HAUL』(Criss Cross)       | 2000年 |
| 『情事の終わりに』(ヴィーナス)                   | 2001年 |
| 『LIVE AT SMOKE VOL.1』(Criss Cross) | 2001年 |
| 『WIDE HORIZONS』(Criss Cross)       | 2002年 |

以上である。そして通算7枚目として登場するのが、今回の『危険な関係のブルース』だ。簡単にメンバー紹介をしておこう。

エリック・アレキサンダーは1968年にイリノイ州の西部で生まれた。当初はアルト・サクス奏者としてクラシックを学んでいたが、高校時代にジャズに目覚め、ニュージャージーのウィリアム・バターソン・カレッジでジャズ・テナーを習得。卒業後はシカゴでボン・フリーマン、チャールス・アーランド、ジャック・マクダフなどのグループで活躍した。1991年にはモンク・コンペティションでジョシュア・レッドマンに次いで2位となる。現在はニューヨークに移って活躍中。

初リーダー作は1992年にシカゴのデルマークに録音した『ストレイト・アップ』で、この作品が一部のファンから注目を集めた。人気を決定的なものにしたのは、1995年に発売した『アップ・オーヴァー&アウト』(同)や1996年の『IN EUROPE』(Criss Cross)が輸入盤店でベストセラーを記録したことによる。以後は、日米のレーベルを通じて作品を発表し、現在もっとも期待されるテナー奏者のひとりとして高い評判を集めるまでになった。

スティーヴ・デイヴィスは1967年にマサチューセッツ州のウースターで生まれた。その後ニューヨーク州のピンガムトンに移って、そこで育つ。祖父や父親の影響で音楽に興味を持ち始め、10歳のころからトロンボーンを吹くようになった。やがて本格的な音楽の勉強がしたくなり、ジャッキー・マククリーンがディレクターを務めるコネティカット州ハートフォードにあるハート大学の音楽学部に入学。

卒業後の1989年以降はニューヨークに進出し、同年からアート・ブレイキー率いるジャズ・メッセンジャーズに参加してたちまち脚光を

**No Problem**  
危険な関係のブルース  
**One For All**  
ワン・フォー・オール

- アウ・ファーザー・フー・アート・ブレイキー**  
Our Father Who Art Blaky (J. Farnsworth) (8:13)
- 危険な関係のブルース**  
No Problem (D. Jordan) (8:19)
- モーニン**  
Moanin' (B. Timmons) (8:26)
- ウィスパー・ノット**  
Whisper Not (B. Golson) (7:48)
- 雨月**  
Ugetsu (C. Walton) (6:10)
- タイム・オフ**  
Time Off (C. Fuller) (7:38)
- プレリュード・トゥ・ア・キス**  
Prelude To AKiss (D. Ellington) (7:46)
- ワン・フォー・オール**  
One For All (S. Davis) (8:28)

---

**エリック・アレキサンダー** Eric Alexander (tenor sax)  
**ジム・ロトンディ** Jim Rotondi (trumpet)  
**スティーヴ・デイヴィス** Steve Davis (trombone)  
**デヴィッド・ヘイズeltaイン** David Hazeltine (piano)  
**レイ・ドラモンド** Ray Drummond (bass)  
**ジョー・ファンズワース** Joe Farnsworth (drums)

録音：2003年4月11日 *アヴァター・スタジオ*, ニューヨーク

©© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

\*

PProduced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.  
Recorded at Avatar Studio in New York on April 11 , 2003.  
Engineered by Jim Anderson.  
Mixed and Mastered by Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.  
(Venus 24bit Hyper Magnum Sound).  
Technical Coordinator by Derek Kwan.  
Cover Photo : Anthony Redpath / CORBIS / Corbis Japan.  
Artist Photos : John Abbott. Designed by Taz.  
Eric Alexander :Appears Courtesy of Milestone Records.

浴びる。このグループには翌年リーダーのブレイキーがこの世を去るまで在籍。その後はエルヴィン・ジョーンズ&ジャズ・マシーン、ライオネル・ハンプトン・オーケストラの一員として活躍し、1992年には恩師のマククリーンが結成したセクステットに抜擢される。

以後はこのグループを中心に現在まで活躍する一方、アヴィシャイ・コーエンのレコーディングに参加。それがきっかけで結成されたチックのオリジンに起用されて大きな注目を集めた。これらのグループでレギュラー活動を行う一方、エリック・アレキサンダー、ジェフ・キーザー、レオン・パーカー、ピーター・バーンスタイン、ベン・ウルフ、ロイ・ハーグローヴといった精鋭と共演し、1991年からは母校で教壇にも立っている。

ジム・ロトンディは1962年にマサチューセッツ州のバットで生まれた。母親がピアノ教師だったことから、8歳でピアノのレッスンを開始している。トランペットを吹き始めたのは12歳からで、ノース・テキサス大学卒業後の1985年からプロとしての活動をスタートさせる。

ただし、当初はクルーズ船で演奏するバンドや、オフ・ブロードウェイのレビュー『ビーハイヴ』に参加したり、レイ・チャールズのバック・バンドで日本を含む世界中をツアーして回った。ジャズ・ミュージシャンとして頭角を表すのは、1991年にジュニア・クック=セシル・ペイン・クインテットに参加してからで、以後はライオネル・ハンプトン、ジョージ・コールマン、マイケル・ワイス、ルー・ドナルドソン、エリック・アレキサンダーなどのグループで活躍。

デヴィッド・ヘイズeltaインは1958年にウイスコンシン州のミルウォーキーで生まれた。母親が歌手兼ギタリストという環境に育ち、子供のころから母親とテレビに出演していた。最初の楽器は8歳のときに弾き始めたオルガンで、14歳でピアノに転向。影響を受けたのはオスカー・ピーターソンとシガー・ウォルトンで、13歳のときから地元のジャズ・クラブで演奏活動を開始している。

その後はチェット・ベイカー、ソニー・スティット、チャールス・マクファーソンたちと共演し、21歳でニューヨークに進出。この時期にはジュニア・クック=カーティス・フラー・グループやジョン・ヘンドリックス&カンパニーで演奏。2年後にミルウォーキーに戻って、音楽学校で正式に理論を学ぶ。再びニューヨークに出たのが1992年のことで、以後しばらくの間はマリーナ・ショウのピアニスト兼アレン

ジャー兼音楽監督として働く。その後はスライド・ハンプトンのグループを経て、自身のトリオを結成し、現在に至っている。

レイ・ドラモンドは1946年にマサチューセッツ州のブルックラインで生まれた。8歳のときからプラス楽器を吹き、ベースに転向したのは1961年のことだ。1971年にはスタンフォード・ビジネス・スクールからMBAを授与された秀才でもある。

1977年にサンフランシスコで自身のクインテットを結成してから注目を浴びようになり、その年のうちにニューヨークに移り、以後はマイケル・ホホワイト、ボビー・ハッチャーソン、ウディ・ショウ、デヴィッド・マレイ、サド・ジョーンズ=メル・ルイス・オーケストラ、ジョニー・グリフィン、ウイントン・マルサリス、ハンク・ジョーンズ、ケニー・パロン、ミルト・ジャクソンなど、幅広いミュージシャンとの共演で、1980年代から90年代にかけてもっとも多忙なベース奏者のひとりとなった。

ジョー・ファンズワースは1968年にマサチューセッツ州のホリヨークで生まれた。音楽一家に生まれて、アート・テイラーやアラン・ドウソンに師事し、1986年から90年にかけてはニュージャージーのウィリアム・バターソン・カレッジで学ぶ。

卒業後の1991年からジュニア・クックのバンドに参加し、その後はジョージ・コールマン、セシル・ペイン、アーニー・ロス、ジョン・ヘンドリックス、ジョン・ファディス、ペニー・グリーン、ペニー・ゴルソンらと共演して現在に至る。

楽器構成からも連想できるように、3管編成のジャズ・メッセンジャーズを彷彿とさせるのが、以上の6人によるワン・フォー・オールだ。それもあって、この作品ではアート・ブレイキーが率いた名門コンボ、ジャズ・メッセンジャーズのレパートリーを中心に演奏が行われている。

そのことを意識して、ドラマーのファンズワースが書いた「アウ・ファーザー・フー・アート・ブレイキー」がアルバムのオープニングだ。簡潔に演奏されるテーマ・メロディはたしかにジャズ・メッセンジャーズ的で、その後に登場するデイヴィスのトロンボーンもどことなくカーティス・フラーを彷彿とさせる。

「危険な関係のブルース」も、ジャズ・メッセンジャーズゆかりの曲だ。この曲は、ロジェ・パディムが監督した1959年の映画『危険な関係』の主題曲として、彼らによって吹き込まれたものだ。ちなみに作曲者は、日本でも人気の高いピアニストのデューク・ジョーダンである。

「モーニン」は、ファンキー・ジャズの幕開けを飾った記念すべき傑作。ジャズ・メッセンジャーズがメンバーを一新して吹き込んだこの演奏は、本国アメリカはもとより、世界各地でファンキー・ジャズの大ブームを巻き起こす。

その「モーニン」をタイトルにしたアルバム『モーニン』(ブルーノート)が、ペニー・ゴルソンを音楽監督に迎えて吹き込まれたのは1958年のことだ。ゴルソンはテナー奏者であると同時に優れたコンポーザーでもある。その彼が残した哀愁の名曲が「ウィスパー・ノット」だ。

3管メッセンジャーズ時代のメンバーによる曲が続いて2曲登場する。最初がピアニストを務めたシガー・ウォルトン作の「雨月」で、これはリバーサイドから発表された『ウゲツ』のタイトル・ナンバーとなった。そしてもうひとつは、3管メッセンジャーズの立役者でトロンボーン奏者のカーティス・フラーが書いた「タイム・オフ」だ。

「プレリュード・トゥ・ア・キス」は、デューク・エリントンが1938年に書いた、何とも粹でロマンチックな内容のナンバー。ジャズ・メッセンジャーズでは、歴代のホーン・プレイヤーがこの曲をフィーチャード・ナンバーとして演奏することが多かった。その例にない、ここではアレキサンダーを中心にした演奏が楽しめる。

ラストはデイヴィスが書いた「ワン・フォー・オール」だ。まさにグループのタイトル曲とも言うべき軽快なナンバーで、ロトンディ、アレキサンダー、デイヴィス、ヘイズeltaインの順でスイングーなソロが繰られる。

[ (c)WINGS 03072007；小川隆夫 / TAKAO OGAWA]